



和歌秘傳抄

一
 二
 三
 四
 五
 六
 七
 八
 九
 十
 十一
 十二
 十三
 十四
 十五
 十六
 十七
 十八
 十九
 二十
 二十一
 二十二
 二十三
 二十四
 二十五
 二十六
 二十七
 二十八
 二十九
 三十
 三十一
 三十二
 三十三
 三十四
 三十五
 三十六
 三十七
 三十八
 三十九
 四十
 四十一
 四十二
 四十三
 四十四
 四十五
 四十六
 四十七
 四十八
 四十九
 五十
 五十一
 五十二
 五十三
 五十四
 五十五
 五十六
 五十七
 五十八
 五十九
 六十
 六十一
 六十二
 六十三
 六十四
 六十五
 六十六
 六十七
 六十八
 六十九
 七十
 七十一
 七十二
 七十三
 七十四
 七十五
 七十六
 七十七
 七十八
 七十九
 八十
 八十一
 八十二
 八十三
 八十四
 八十五
 八十六
 八十七
 八十八
 八十九
 九十
 九十一
 九十二
 九十三
 九十四
 九十五
 九十六
 九十七
 九十八
 九十九
 一百



和奇秘傳抄

家傳之抄也



春樹頭抄

春樹頭抄之在書之大事

Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including the characters '春樹頭抄' and '和奇秘傳抄'.

○春樹歌秘抄

出仁葉之大事

凡和歌八詞を以て冬を以て春の心
と云ふ一傳ありしに春の心は春の心
肝要と云ふれりしを春の心相傳
して春の心の外に春の心
と云ふも春の心と云ふも春の心
て春の心と云ふも春の心
春の心の外に春の心
春の心の外に春の心
春の心の外に春の心
春の心の外に春の心

和訓乃て春の心



春樹歌秘抄

義理をあらわし

○第一を結ぶことこの事

かゝるもたぬふりもふりつち

ついでにゆくふりかたふり

ふりかたふりかた

らむとふりかたふりかた

りしてふりかたふりかた

糸波の浪の中をのちのち

いそいでふりかたふりかた

くはるもたぬふりかた

きりかたふりかた

をふりかたふりかた

まみきりかたふりかた

むりりゆきかたふりかた

あきらむりかたふりかた

いそいでふりかたふりかた

村京ふりかたの名

ふりかたふりかた

今日もやいづくを眺むるも

いづれかみよるも

いふもむかひを後あはれ

いづれかみよるも

世は捨てていづれか

いづれかみよるも

いづれかみよるも

いづれかみよるも

いづれかみよるも

いづれかみよるも

いづれかみよるも

いづれかみよるも

いづれかみよるも

いづれかみよるも

いづれかみよるも

いづれかみよるも

いづれかみよるも

いづれかみよるも

いづれかみよるも

いづれかみよるも

やみまの別りさか

△洛定してたまふ事

思もむん世に福むん世に
此にくらむり

△おつしつは先てしぬ事

身成のこの船名しつら
そとにハてしん事ふんぬめを等

のいふことしぬしぬ事

かす心しぬのちるし月しぬ

ちちんを神にゆら

道

道遠し一歩のちしぬ事

まきののちしぬ事

今しんをしぬ事

あふらふ山をみる事

△かすしぬ事

△かすしぬ事

△かすしぬ事

あふらふ山をみる事

あふらふ山をみる事

あふらふ山をみる事

おーあゝぬぬ人ぬ

とふてふまふ

た玉の條は流せしらすむのふしとくか

のふのぬ名を略したるは

ちのふのふふふふふふふ

ふふのふふのふふふふふ

ふふふふふふふふふ

世奇のふふふふふふのふら

○卯ニやふふふ

私云ふふふふふ

世ふふふふふふのふふふふ

乃音下てをふふふふふ

私云ラサ一云ハ言ノ下ノ字ヲ云クハ一云ハ言ノ上ニテ

くく寸つぬふむゆるふふふ

花そしゆく浪そた川流そ袖ふ玉は

るふふふふふふふふふ

おふふふふふふのむふふふ

のふふふふふふふ

上件の外に

たふふふふふふのふふふ

たふふふふふふふふ

ふふふふふ

あはくしは海の子の心

うそとまりしをいふは

美を兄一月とそみよ友とて

松と君とふふと心は

心まりに用ひ侍るその字あり

知れそと云ふりくふとめ

つふ物そ私云是借馬ノハナリト心ねと松ノソバスマ

そとヤとの法現の心は

とく奇し

正統野の家と云ふ海

まゝある茶のまめや

是はそもの心まや

まゝそとと云ふり

そとと云ふ味も

美野小生は子よの

そとの心まひ侍る

是れは心まひ侍る

心まひ侍る

梅と云ふ

おしほしほ

是のてある一風吹風を吹き
あつたそ啼にしつらうまゆの
あつたそ啼にしつらうまゆの
あつたそ啼にしつらうまゆの

あつたそ啼にしつらうまゆの
あつたそ啼にしつらうまゆの
あつたそ啼にしつらうまゆの

あつたそ啼にしつらうまゆの
あつたそ啼にしつらうまゆの
あつたそ啼にしつらうまゆの

あつたそ啼にしつらうまゆの

あつたそ啼にしつらうまゆの

あつたそ啼にしつらうまゆの

あつたそ啼にしつらうまゆの

あつたそ啼にしつらうまゆの

あつたそ啼にしつらうまゆの

あつたそ啼にしつらうまゆの

△そとそこのは自ふるふ。花
此の能く名かきひはり
うそとらとらよかたれもいふ
君らんそ君らんか君らんよふらふら
ひ押しそあし急しあ
御後 あむふ河原のふら
あふんたりてふらふらとら
あはかきり今そとあははふら
ハ朝あぐーいほはははは

○才ふふと云事
自こしとらあさり 五音分回ふ音
てとらあさり 五はせてはははは
是うてとらあさり
おははあしんあふらあしんあは
かあはあはあはあはあはあはあは
あは月あはあはあはあはあは
てとらあさりとらあさりあはあは
らあはあはあはあはあはあはあは

花

あはあはあはあはあはあはあは

りふ生... 山... 山...

あふそ互ふ欠か... 山...

あふそ互ふ欠か... 山...

月とそ月と恨と... 山...

山... 山...

山... 山...

山... 山...

山... 山...

血... 山...

山... 山...

山... 山...

山... 山...

山... 山...

山... 山...

山... 山...

山... 山...

う香とくは

は絲を也

さり一美れし一

あら也

○第四の字の事

凡そ一字一音にて

アハヒヤヤ 音ヤ 水目也

音ヤ 音ヤ 音ヤ 音ヤ

音ヤ 音ヤ 音ヤ 音ヤ

このおと

福の正流也

福の正流也

ぬむす流也

おのり

音

あ

音

みち

お

はる

私云道アルトル

伊やまのふぶきのそと

ついでに日吉の路とされては

ふぶきのそとをひらき

ちいさな女をさす

うみあやうき

佐原のふぶきのそと

ふぶきのそと

うまの女をさす

あはれな女をさす

うまの女をさす

思ひのそと

あはれな女をさす

是におうてふぶきのそと

あはれな女をさす

あはれな女をさす

あはれな女をさす

あはれな女をさす

あはれな女をさす

あはれな女をさす

あはれな女をさす

是れが、^ハヤトの^ト心^ハこゝにあり

ハヤトの心^ハこゝにあり

ハヤトの心^ハこゝにあり

ハヤトの心^ハこゝにあり

ハヤトの心^ハこゝにあり

ハヤトの心^ハこゝにあり

ハヤトの心^ハこゝにあり

ハヤトの心^ハこゝにあり

ハヤトの心^ハこゝにあり

ハヤトの心^ハこゝにあり

ハヤトの心^ハこゝにあり

ハヤトの心^ハこゝにあり

ハヤトの心^ハこゝにあり

ハヤトの心^ハこゝにあり

ハヤトの心^ハこゝにあり

ハヤトの心^ハこゝにあり

ハヤトの心^ハこゝにあり

ヤトハヤトノ心ニ在リ

ヤトハヤトノ心ニ在リ

ヤトハヤトノ心ニ在リ

ヤトハヤトノ心ニ在リ

ヤトハヤトノ心ニ在リ

ヤトハヤトノ心ニ在リ

家波れとくろくしゆ、孫ら十

あはれとくろくしゆ、人のくし

△体めらやれ字のきさ川やあゆら

あはれとくろくしゆ、川やあゆら

△はひりやれ、是、前、小、平、始、み、一

△はひりやれ、是、前、小、平、始、み、一

ノ字、小、あ、は

△哉とるしゆ、とくろくしゆ、人、始、み、小、あ、は

とくろくしゆ

△心、す、お、し、り、か、し、り、は、は

く、し、り、か、し、り、は、は

夕、日、の、く、し、り、か、し、り、は、は

は、は、は、は、は、は、は、は

△あ、は、れ、と、く、ろ、く、し、ゆ、

あ、は、れ、と、く、ろ、く、し、ゆ、

前、の、あ、は、れ、と、く、ろ、く、し、ゆ、

△あ、は、れ、と、く、ろ、く、し、ゆ、

あ、は、れ、と、く、ろ、く、し、ゆ、

そこのしるしをぬきねて

あつ月十日のしるしをぬきねて

しるしをぬきねて

甲斐根城のしるしをぬきねて

しるしをぬきねて

しるしをぬきねて

しるしをぬきねて

しるしをぬきねて

しるしをぬきねて

しるしをぬきねて

しるしをぬきねて

しるしをぬきねて

しるしをぬきねて

しるしをぬきねて

しるしをぬきねて

しるしをぬきねて

しるしをぬきねて

しるしをぬきねて

しるしをぬきねて

しるしをぬきねて

しるしをぬきねて

そのうじのあはれは

落筆してふゆの神 カキテ せうらう

うらやまのこころは

かゝりてふしむる カ せうらう

うらやまのこころは △ 体たへ

の △ 今般のうらやま

君のこころは △ 心

○ 牙 △ と云て

凡そ △ せうらう △ 心 △ 心 △ 心

心 △ 心 △ 心

せうらう △ 心 △ 心 △ 心

都 △ の △ 心 △ 心 △ 心

物 △ 心 △ 心 △ 心

心 △ 心 △ 心 △ 心

心 △ 心 △ 心 △ 心

心 △ 心 △ 心 △ 心

心 △ 心 △ 心 △ 心

心 △ 心 △ 心 △ 心

心 △ 心 △ 心 △ 心

心 △ 心 △ 心 △ 心

おはまのあまのついでに

あまのついでに

か

しるしに

あまのついでに

あまのついでに

あまのついでに

あまのついでに

あまのついでに

あまのついでに

あまのついでに

あまのついでに

あまのついでに

あまのついでに

あまのついでに

あまのついでに

あまのついでに

あまのついでに

あまのついでに

あまのついでに

あまのついでに

あまのついでに

あはれなるはなはたしき

あはれなるはなはたしき

あはれなるはなはたしき

あはれなるはなはたしき

あはれなるはなはたしき

あはれなるはなはたしき

あはれなるはなはたしき

あはれなるはなはたしき

あはれなるはなはたしき

あはれなるはなはたしき

あはれなるはなはたしき

あはれなるはなはたしき

あはれなるはなはたしき

あはれなるはなはたしき

あはれなるはなはたしき

あはれなるはなはたしき

あはれなるはなはたしき

あはれなるはなはたしき

あはれなるはなはたしき

あはれなるはなはたしき

あはれなるはなはたしき

あはれなるはなはたしき

きほちりておはなせとわなをりて

△おのゝももをりてはさへもさへりて

是は一首なりとてまへにさへりて

若狭夜月かなつりてよはに端は

かみりてよはにさへりて

△おのゝももをりてはさへもさへりて

そのよはにさへりて

月かなつりてよはに端は

かみりてよはにさへりて

是は一首なりとてまへにさへりて

あつりてよはに端は

かみりてよはにさへりて

是は一首なりとてまへにさへりて

味なりとてまへにさへりて

一首なりとてまへにさへりて

五月の月花をりてよはに端は

かみりてよはにさへりて

駿河の月花をりてよはに端は

かみりてよはにさへりて

○ 伊予の月花をりてよはに端は

心は人の心ならずとも人の心ならずとも

心は人の心ならずとも人の心ならずとも

心は人の心ならずとも人の心ならずとも

心は人の心ならずとも人の心ならずとも

心は人の心ならずとも人の心ならずとも

心は人の心ならずとも人の心ならずとも

心は人の心ならずとも人の心ならずとも

心は人の心ならずとも人の心ならずとも

心は人の心ならずとも人の心ならずとも

心は人の心ならずとも人の心ならずとも

○ 弟十二哉と云ふ事ある事

△ 祿は人の心ならずとも人の心ならずとも

心は人の心ならずとも人の心ならずとも

心は人の心ならずとも人の心ならずとも

△ 祿は人の心ならずとも人の心ならずとも

心は人の心ならずとも人の心ならずとも

心は人の心ならずとも人の心ならずとも

心は人の心ならずとも人の心ならずとも

心は人の心ならずとも人の心ならずとも

心は人の心ならずとも人の心ならずとも

あはれにあらばとてさるる世に

可^レしはあはれにあらばとてさるる世に

又いふにあらばとてさるる世に

△物^レなるに

横^レにあらばとてさるる世に

ふりてあらばとてさるる世に

○卯^レ十^レにあらばとてさるる世に

之^レ源^レにあらばとてさるる世に

さるる世にあらばとてさるる世に

心^レにあらばとてさるる世に

はらばとてさるる世に

五月^レのあらばとてさるる世に

又^レ月^レのあらばとてさるる世に

はらばとてさるる世に

表^レはあらばとてさるる世に

何^レなるにあらばとてさるる世に

表^レはあらばとてさるる世に

それ^レなるにあらばとてさるる世に

部^レなるにあらばとてさるる世に

卯^レのあらばとてさるる世に

○ 久集詩

琴詩酒及皆拙我
雪月花時最憶君

此詩と云字はしるへし
口傳記はしるへし

あの子らへは
あの子らへは
あの子らへは

○ 牙十通りてしと云ふ下巻末七事

ち
ち
ち

小
小
小

ハ
ハ
ハ

を
を
を

を
を
を

を
を
を

元より福は...
...
...

我...
...
...

天津...
...
...

忠孝...
...
...

友...
...
...

法...
...
...

標梁...
...
...

郭...
...
...

康秀...
...
...

あ...
...
...

春日野 北の北野

北の北野

○ 弟十七

調簡 宛都 拾元

依 字 か

○ 子 北 浦 小 打 生

仁 北 字 根 小 名

北 字 根 小 名

北 字 根 小 名

北 字 根 小 名

○ 卯 十 八

卯 十 八

卯 十 八

卯 十 八

卯 十 八

卯 十 八

卯 十 八

卯 十 八

卯 十 八

卯 十 八

くすまね不摩時言はれむ

あやめれまむいふとて

あやめれまむいふとて

あやめれまむいふとて

あやめれまむいふとて

あやめれまむいふとて

あやめれまむいふとて

あやめれまむいふとて

あやめれまむいふとて

あやめれまむいふとて

あやめれまむいふとて

あやめれまむいふとて

あやめれまむいふとて

あやめれまむいふとて

あやめれまむいふとて

あやめれまむいふとて

あやめれまむいふとて

あやめれまむいふとて

あやめれまむいふとて

あやめれまむいふとて

あやめれまむいふとて

あやめれまむいふとて

あやめれまむいふとて

あやめれまむいふとて

あやめれまむいふとて

あやめれまむいふとて

あやめれまむいふとて

あやめれまむいふとて

あやめれまむいふとて

あやめれまむいふとて

あやめれまむいふとて

あやめれまむいふとて

あやめれまむいふとて

あやめれまむいふとて

あやめれまむいふとて

あやめれまむいふとて

あやめれまむいふとて

あやめれまむいふとて

あやめれまむいふとて

あやめれまむいふとて

あやめれまむいふとて

あやめれまむいふとて

此と云ふ事は...
...
...
...
...

伊輝...
...
...
...
...

志海...
...
...
...
...

右...
...
...
...
...

...
...
...
...
...

第二十一

...
...
...

子孫振神侍

のり

海大國の難波

草

は

と

こ

の

り

の

り

の

り

の

り

の

り

の

り

の

川崎のちのちの月此ひり

歌をいふはちのちのち

阿のちのちのちのち

いふはちのち

清上人のちのちのち

すゑのちのちのち

志士のちのちのち

志士のちのちのち

てははちのちのち

弟のちのちのち

弟のちのちのち

弟のちのちのち

弟のちのちのち

弟のちのちのち

弟のちのちのち

弟のちのちのち

弟のちのちのち

弟のちのちのち

弟のちのちのち

弟のちのちのち

弟のちのちのち

弟のちのちのち

百... 華... 知... 事... 月... 事...

這一冊大藏御法... 傳也... 此... 道... 不可許之可

元和八年八月十日

亞提島北光廣

五刺

右條之者正道之端極深秘之大
事於奇道末代之明鏡也維
令維運千金之少者不可相
傳之若皆此旨和歌之神
聖廟之可象所蜀也仍如件

相傳代之真書如斯

相傳之次序

坊小路殿代

淳惠

竜本寺殿

金澤下野守入道

源意

月智牛物抄輔

源政宣

佐木刑部少輔

源信秀

別傳長中

元龜元年

慶長十三年

巨哉判

氏舞判

經里判

元龜七年

或人竹去を秋一あくを不海六
ひそか小せい新記を付て是所
書之川戸物あり治之必
他(世)あをう川(其)不可
あ(新)あん(こ)く(新)者小(号)書(を)
あ(一)ち(あ)く(三)神(此)を(細)を
か(ら)む(る)物(り)を(秋)一(く)

安永

安永三年六月廿九日夜書之

Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or manuscript. The text is written on aged, yellowed paper with significant damage and staining, particularly along the right edge and bottom. The script is dense and difficult to decipher due to its cursive nature and the condition of the document.

Blank page with significant damage, including large holes and staining, particularly along the right edge and bottom. The paper is yellowed and shows signs of severe wear and tear.

Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or manuscript. The text is written on aged, yellowed paper and is arranged in approximately 12 lines. The script is dense and characteristic of early modern handwriting. The paper shows signs of wear, including staining and some loss of material at the edges.